

二〇二二年二月三十一日

除夜の鐘間合ひに落ちて夢の中  
大晦日捲るトイレのカレンダー  
目瞑りて大晦日なる仕舞風呂  
いく筋も柚の煙や山眠る  
金婚の二人あひ謝し晦日そば  
大晦日遅れを正す古時計  
寒風にブレイクダンス濯ぎもの

素 秀  
豊 実  
せいじ  
あひる  
たか子  
む べ  
はく子

二〇二二年二月三〇日

一穢なき峡の凍空鳶の笛  
コロナ禍に余白の多き日記果つ  
しあわせと母のひとこと園小春  
二日目の孫打ち解けし年の暮

素 秀  
千 鶴  
あひる  
せいじ

二〇二二年二月二十九日

泥田からゆるり足抜く蓮根掘り  
国訛り弾む団欒掘炬燵  
年送る孫と人生ゲームして  
寒鴉陸軍墓碑を閲兵す  
小つごもり簡素となりし厨ごと  
漬樽のならぶ師走の京老舗  
野仏の福耳を打つ雪つぶて

せつ子  
千 鶴  
せいじ  
ぽんこ  
たか子  
凡 士  
素 秀

二〇二二年二月二十八日

冬耕の人と鳥の黒き影  
水仙や墓所は港の見える丘

素 秀  
素 秀

年用意日がな黒豆煮る匂ひ

千 鶴

冬鷗群れ飛ぶ沖の大漁旗  
花瓶へと活くる雪折実南天

凡 士  
こすもす

二〇二二年二月二十七日

夜を走る鼯の口の赤きかな  
久に訪ふ吾にふるさと山眠る  
北風にぞめく竹林裏参道  
車窓いま袋叩きに玉霰  
ひさびさに家族集ひて年惜しむ  
木枯しの山頂古都をパノラマに  
延々と風車連ねて山眠る

素 秀  
あひる  
せいじ  
せつ子  
もとこ  
せいじ  
凡 士

二〇二二年二月二十六日

枯木宿樹影揺らめく磨り硝子  
菰巻かれ蘇鉄はオブジェ然となす  
冬天の真澄に舞へる鳶高し

む べ  
凡 士  
せつ子

二〇二二年二月二十五日

羽欠けしままに聖樹の天使かな  
剪定の小枝で飾り松創る  
断捨離のごとくに庭木剪定す  
着ぶくれて散歩の犬に追ひ越され

あひる  
たか子  
明日香  
せつ子

毎日句会みのる選・二〇二二年一月二日